

古典ギリシア文学

この度エリニカは20周年を迎えることになり、心からお慶び申し上げます。ギリシアの歴史家ヘロドトスによりますと、エジプトのピラミッドのうち最大のものであるクフ王のピラミッドは（道路建設などを除き）20年の歳月をかけて建造されたということですが、実際に20年を要したかどうかは別として、ギリシア人はピラミッドのような大きな事業はふつう20年を必要とすると考えていた節があります。例えば、ホメロスの物語で有名なトロイア戦争は、戦争自体は10年間続いてギリシア側が勝利を収めました、その前の準備期間を合わせますと合計20年を要したといわれます。昔のギリシア人の目から見ても、藤村さんはこの20年の間にエリニカを立派に育て上げるという、大変大きな事業をなし遂げられたことになります。まことに記念すべき20周年でありまして、改めてお慶びを申し上げますとともに、将来の益々盛んな発展をお祈り申し上げます。

さて今日は古典ギリシア文学についてお話するようにとのことですが、古代のギリシア文学は紀元前8世紀から約千年間続いた歴史をもっており、このうち紀元前8世紀から4世紀までの約400年の文学が、一般に古典ギリシア文学と呼ばれているものに当たります。しかもこの400年の間に、叙事詩、独唱抒情詩、合唱抒情詩、悲劇、喜劇などの新しいジャンルが続々と生まれ、独創的な作家が次々に現れて活躍しました。ですから、古典ギリシアの文学について短い時間でお話することは大変難しいことですが、本日はこの文学の大きな特色と思われる点を取り上げてお話してみたいと思います。

文学というものは、どこの国の文学でもそうですが、世界における人間のあり方、生き方を私たちに具体的に見せてくれるものであるということが出来ます。私たちは人生において様々な経験をしますが、私たちの経験する現実には複雑に入り組んでいて、容易に捉え難い面があります。文学は、これを構造的に捉える、例えば、私たちが日常経験する出来事の一つ一つは互いになんの脈絡もないように見えますが、文学は、これらの出来事から意味があるものを選び出してこれを脈絡のあるものとして繋ぎ合わせる、すなわち、その全体が出発点、中間点、クライマックス、最後に終結点をもつ、統一された構造として捉えることを可能にします。つまり、文学は最初から終わりまで一貫した、合理的な構造をもつことによって、普遍的なものとなります。言いかえれば、文学

は人生のモデルを提供してくれるということです。

例えば、デンマークの王子の物語を扱った『ハムレット』というシェイクスピアの有名な劇がありますが、もしこの劇で語られる出来事が実際に起こったとして、私たちがその目撃者となったならば、シェイクスピアの劇を見るときほどの感動を受けることはないだろうと思います。『ハムレット』に語られる出来事はおそらく1年以上にわたることであり、たとえ私たちがその出来事の目撃者となっても、その全体を把握することも、その意味を十分に理解することもたぶんできません。これにたいしシェイクスピアは、ハムレットをめぐる事件をわずか数時間の劇の中に凝縮し、より純粋な形にすることによって、私たちがその出来事の全体を把握するのみでなく、その意味を理解することができるようにしてくれます。すなわち、この劇においてもっとも重要な、本質的な出来事が選び出され、互いに緊密な因果関係で結ばれる（すなわち統一的に構成される）ことによって全体の把握が可能となります。この点、シェイクスピアの劇のほうが実際の事件に比べてよりリアルであり、より真実を捉えているということが出来ます。

ギリシア人はこのような人生の構造を捉え、これを一つのモデルとして示すことにおいてきわめて巧みでありました。ホメロスの叙事詩、あるいはギリシア悲劇を見ても、その構造の巧みさは驚くべき面があります。御存じのように、ギリシア文学はやがてラテン文学に引き継がれ、このギリシアとラテンの文学がヨーロッパの文学を生み育てることになりましたが、ヨーロッパの作家たちはとくにこの構造の捉え方、モデルの捉え方という点において絶えずギリシア文学をお手本としてきました。ヨーロッパ文学から学んだ近代、現代のわが国の作家たちも、間接的ですが、ギリシア文学をお手本としたことになります。

なぜギリシア人は、このように人生の構造を捉えこれを表現することにおいて巧みであったのか。これは大変難しい問題ですが、私は次のように考えています。

初めに申したように、一般に文学は人間のあり方、生き方を私たちに具体的に見せてくれるものですが、ギリシアの詩人、作家たちは、一方の対極に「不死」（つまり決して死ぬことがない、永遠の生命をもつ）神様を据え、他方の対極に「死すべきもの」である人間（短い生命しかもたない人間）を置くという、きわめて尖鋭的な形で人間のあり方を示しました。日本ではイザナギの命の妻であったイザナミの命が亡くなったときイザナギの命はもう一度最愛の妻に会いたいと思って黄泉の国まで出かけていったという話（『古事記』）があ

るように、日本の神様は人間と同じように死ぬことがありますし、一方では人間が死ぬと神様になって神社に祀られることがあります。日本では神様と人間の区別は曖昧です。これにたいしギリシア人は、永遠に生きる神様と、短い生命しかない人間とを厳重に区別しました。ギリシア人は、人間のあり方をこのように対極的に捉えることによって、人間という存在の本質をえぐり出すことができました。こういう対極的な捉え方自体がすでに構造的であるといえます。

ホメロスの叙事詩を読みますと、絶えず神様が登場して人間に働きかけますが、一方では神様同士が対立して激しく争い、この神様同士の争いが人間の行動に影響を及ぼすということが起こります。したがって、神様の物語と人間の物語が平行して語られるということになります。ホメロスの物語を初めて読んだ読者からよく聞くことですが、多くの読者は、神様が大量登場して絶えず人間の行動に干渉するのを見て、物語自体の面白さを十分に味わうことができないといいます。神様が次から次に登場するため、人間の行動自体を捉えることが十分にできないというわけです。

しかし、神様の行動をよく見ますと、神様は、人間に働きかけるとき、その人間にふさわしい仕方で働きかけていることが分かります。例えば神様は、もともと正しい人間であれば正しい行動を取らせる、卑劣な人間であれば卑劣な振舞いをさせるという仕方で、働きかけているのが分かります。したがって、人間は自分の行為の結果を一方的に神様のせいにすることはできません。そこに自分自身の責任を認めなければならないということになり、もし人間がその行為の結果破滅することになれば、その人間の破滅は彼自身の中に原因があったということになります。そうだとすると、ホメロスの物語において、神様の登場は不必要であり、人間だけの物語にすればよかったのではないか、という疑問が当然起こります。

これは、私たちの現実を考えてみると分かりやすいと思います。私たちは、ときには大変な失敗をします。その原因はすぐに分かる場合もありますが、よく分からないとき「魔がさした」と言ったりします。また飛行機事故が起こって大量の人が亡くなります。しかし大量の人が亡くなったにも拘らず中には助かる人もあります。なぜAさんは死んだのに、その隣に座っていたBさんは助かったかということは分かりません。Bさんが助かったのは「運が良かった」あるいは「たんなる偶然」ということになります。

ホメロスの物語では、「魔がさした」とか「運が良かった」ということはありません。ほとんどすべての場合、神様が人間の行動に関与する結果として、

人間が破滅したり助かったりします。つまり、私たちが「魔がさした」とか「運が良かった」とかいう、説明にならない説明をする場合、ギリシア人は、これこれの人間の行動は、これこれの神様がそうするように促したからだ、あるいはそのように働きかけたからだという、説明が与えられます。また神がそのように人間に働きかけるのも、神様のたんなる気紛れのせいではなく、神様同士の対立や争いの結果である、あるいは人間が神様の憎しみをかうようなことをした結果であるといわれます。つまり神様の行動自体も合理的に説明されます。神様自体が合理的な存在かどうかは別にして、人間の行動に神様を関与させることによって、神様の行動も人間の行動もすべてが合理的に説明されます。ということは、人間の行動がすべて一貫して合理的な、脈絡のあるものとなる、つまり、人間の行動のすべてが因果関係で結ばれた構造をもつものとして語ることができるようになります。神様の行動というのはもちろんフィクション、作りごとですが、しかし、たんに「魔がさした」とか「運が良かった」「偶然にそうなった」とかいう説明よりもはるかに合理的です。実は、ホメロスの物語などに見られる神様は、このような合理的な考え方に基づいているのです。このような合理的な物事の捉え方、つまり人間の行動を含めてこの世の現象のすべてを因果関係によって起こるものとして捉えようとする考え方が、やがて、ギリシアの哲学を生み出すことになりました。

一方、ギリシア悲劇の場合は、ホメロスの物語と異なって、舞台という一種の現実の中に私たちと同じ人間が目の前に登場して事件が起こります。ときには舞台の上に神様が登場することもあります。次第に人間中心の劇となり、神様は舞台の背後に退きます。しかし私たちは、それでも神様が舞台の背後で人間の行動に関与していることを感じるができます。人間の行動を、神様をそこに導き入れることによって一貫して合理的な、構造をもつものとして捉えるというやり方は、悲劇においても本質的に受け継がれているわけです。しかも、現実の世界の一部を切り取ってきたかのように思われる舞台の上での出来事が私たちの目の前に示されるのですから、普遍性をもった人生の構造がより説得的な形で私たちに示されるということになります。

一方の対極に「不死」である（永遠に死ぬことがない）神様を置き、他方の対極に「死すべきもの」である人間を置くという形で人間のあり方を捉える、すなわち人間のあり方を対極的に捉えることが、文学において人間のあり方を構造的に捉えることに繋がると申しましたが、このことは同時に、世界における人間という存在の本質をえぐり出すことに導きます。このような形で人間の

存在を突き止めた上で、人間はいかにあるべきか、そして人間が人間として生きるには何が必要かといった問題を突き詰めていくとき、そこに自由、秩序、正義、さらにフーマーニタース、すなわち「人間らしさ」「人間の品位」といった理念が、私たちの人生を導くべき理念として明確に捉えられることになります。このように古典ギリシアの文学は、一方では人生の構造をモデルとして示すという点において、他方では私たちがそれによって生きるべき理念を明確に捉えこれを説得的な形で示す点において、後代の文学の規範、お手本となりました。ギリシア文学が古典文学と呼ばれる所以です。

最後に、もう一つ付け加えておきますと、ギリシアでは後代におけるような、文学、哲学、歴史といった明確な区分はありませんでした。トロイア戦争の出来事を語るホメロスの物語は歴史の要素を含んでいます。またホメロスの物語などにおいて神様が登場し人間に働きかけることは、すべての出来事を因果関係によって捉えようとするギリシア人の合理的な考え方に基づくものであり、このような合理的な物事の捉え方が、ギリシアの哲学を生み出すことになったと申しましたが、このような合理的な考え方は改めていうまでもなく、プラトンやアリストテレスなどの哲学に共通するものです。他方プラトンの哲学は、登場人物の対話、つまり登場人物が科白をやりとりする形で展開している点などに、文学的な面を多く残しています。ギリシア文学は、ギリシアの歴史や哲学と多くの点で共通の基盤をもつものであって、ギリシアの文学、歴史、哲学は一つの文化現象と考えたほうがよいと思います。ヘロドトス、トゥキュディデスの歴史やプラトンやアリストテレスの哲学を読むことは、同時にギリシアの文学をより深く理解することに繋がります。したがって、皆さんがホメロスの叙事詩やギリシア悲劇などを読まれるとき、それは歴史や哲学と共通の基盤をもつものであり、これらはギリシアの文化現象として一つのものであることを認識して、古典ギリシアの文学に親しんで頂きたいと思います。

以上、簡単ですが古典ギリシアの文学の特色と思われる二、三の点についてお話しました。

(1998年11月21日エリニカ20周年記念 於 北浜三井ガーデンホテル)